
ブレイクスルー

おたんこなす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイクスルー

【Zコード】

N3407BA

【作者名】

おたんこなす

【あらすじ】

一ノトの男、猫、アブラゼニ。

弱肉強食の世界でまじりあう三者の人生を描いてみました。ありえない展開の中でそれぞれの立場からそれぞれの気持ちを描いてみました。

暑い夏だった。蝉がそらじゅうで鳴いている。まだ幼かつた私は木や電柱にとまつて鳴いている蝉を見つけることに不思議な魅力を感じて強い日差しの中を帽子もかぶらずにつるつろしていた。何匹目の蝉だつたろうか？背の低い木にとまつて鳴いているアブラゼミを見つけたときのことだ。その木はブロック塀から少し頭が出るぐらいの高さで、子供の私でも頑張れば手が届きそうな気がした。そんな低い木にとまつたものだから蝉は見つかりやすかつたのだろう、私以外にも蝉を見つめる者があった。猫である。ブロック塀の上をそろりそろりとやってきたのだ。私は直感的にこの猫は蝉を狙っているのだと思った。蝉を助けなくてはいけない。私は猫を追い払おうとしたがなかなかうまくいかなかつた。このままではいけないと思った私は武器を使うことにした。どこかに棒でも落ちていなかつていいかとキヨロキヨロと辺りを見回した。しかし、これが良くなかつた。探しながらふと気がついたのだ、蝉の鳴き声がしなくなつていることに。顔を上げるとそこにとまっていたはずの蝉が居ない。猫を見るとモグモグしている。愕然とした。これが弱肉強食…。幼い私の前に自然是圧倒的すぎたのだ。それからと言うものは二ユースで殺人事件や戦争の話を聞く度に猫に食われたのだと思うようになった。大人になつた今もその表現は変わることがなかつた。表現だけが残りあの頃受けた衝撃は消えていた。当時は猫を恨みもしたが、今では何とも思つていない。ところが自分が蝉になつたとき、あのとき現れた猫のように、憤りがそろりそろりと近づいてきたのだ。そして一瞬のうちに私の心をえぐつた。

「ちくしょう…何で俺が二ートなんだよ！…いつもこいつも俺を、この俺をバカにすることを楽しんでやがる！許せん！俺は鳴くだけの蝉とは違うのだ！ぶっ殺す！」

と、パソコンの画面に向かつてブツブツ呟いているのが私である。

これが自分と思うと悲しいが仕方ない。エロサイトを中心に色々なサイトを巡つて一日が終わる。まじ終わつて、こいつ。こいつっていうか俺。そんな終わりを迎えている私であるが、もちろんこのままフェードアウトする気など無い。こんなに社会不適合者だった自分が情けなくてしようがないし悔しいから「」を叩き直して必ずこの社会で成功を掴んで周りを見返してやる！と思えたままだ救いようがあつたのだろうけどそうは思わなかつた。じゃあ、どう思つたかというとこうだ、こんなに社会不適合者だった自分が可哀想でならない。こんな自分にした社会に報復をしてやりたいがそんな大それたことはできないから今日もエロサイトを巡つて寝てしまおう。うわ、自殺したい…。

暑い夏だつた。蝉がそこらじゅうで鳴いている。まだ幼かつたニヤたしは木や電柱にとまって鳴いている蝉を見つけることに不思議な魅力を感じて強い日差しの中をうろついていた。何匹目の蝉だつたろうか？背の低い木にとまって鳴いているアブラゼミを見つけたときのことだ。その木はブロック塀から少し頭が出るぐらいの高さで、猫のニヤたしには容易に捕まえられるように思われた。そんな低い木にとまつたものだから蝉は見つかりやすかつたのだろう、ニヤたし以外にも蝉を見つめる者があった。人間である。ブロック塀の下をのろりのろりとやつてきたのだ。ニヤたしは直感的にこの人間は蝉を狙つているのだと思った。蝉を食べなくてはいけない。人間はニヤたしを追い払おうとしたがそれはさせなかつた。すると、このままではいけないと思ったのだろう、人間は何かを探し始めた。ニヤたしはこの人間はアホだと思った。人間が探し物をしている間にニヤたしは蝉を食らつた。人間が顔を上げたときのその表情はとてもおかしかつた。ニヤたしはモグモグしながら笑いを堪えるのが大変だつた。これが弱肉強食…。幼いニヤたしは生きるということ

を知った。それからと書つもの「ヤたしは他人を出し抜いてでも餌にありつこうと必死であった。遠慮などしていたら食いつぱぐれると思ったからだ。

「ヤー、ヤー。自分が猫であることを忘れないよ！」たまに鳴いておひづ。『ヤー、ヤー』。

ところで、そんな「ヤたしのやり方が気に入らなかつたよ」で、周りの猫達は「ヤたしを敵視し始めていた。次第に孤立していく「ヤたし。可哀想な「ヤたし。これからは周囲の顔色を伺つて、角が立つようなことは避けて生きよう。何が弱肉強食だ、平和が一番。そのためなら多少腹が減つていたつて構わん。猫なのにわんだつて、えへ。と思えばまだ良かつたのかもしないが実際はそうは思わなかつた。じゃあどう思つたかと言つとこだ、あいつら野良猫のくせに生きるといふことが分かつていない。飼い猫と違つて野良は日々命がけで戦つていかなくてはならない。それを教えてやろうと思つたのに、弱い自分を棚に上げてあることかこの「ヤたしを逆恨みするとは許せん。根性叩き直してやる！生きるとはどうこうことか！

暑い夏だった。蟬である私は女子の氣を惹こうと必死に鳴いていた。それが良くなかった。必死に鳴くあまりそこが外敵からすぐ下手の届く範囲であることに気がつかなかつたのだ。悲しい雄の性よ。ミンミン。何かが近づいてきたと思ったときには遅かつた。どうやら私を争つて猫と人間が対峙しているようだつた。どうにか隙を見て逃げようと思つたがそれも叶わなかつた。どう言つわけか人間の方が戦線離脱をしやがつたのだ。ちくしょう。おかげで私は猫に食われてしまつた。だがしかし、私もただでは死なぬ！補食される直前に私は仲間に信号を飛ばしていたのだ。ナイス私。私の信号を受けとつた仲間達がいざれこの恨みを晴らしてくれるだろ？。ミンミン

ン。

ぶつ殺せ…！

ふう、スッキリした清々しい気分である。

今日も何の変哲もない一日であった。明日は何か変わることいつものように思つて布団に入ろう。

やばいよね？私の目には涙が浮かんでいた。このままではいけない、絶対にやばい。こんな風に悶々と日々を過ごしていくも腐っていくだけだ。これ以上腐るかは疑問だが、蝉でさえ鳴くぐらいはするのに私ったらジッとしているだけじゃないか。そのくせ何か変化を求めている。いけないよお、このままじやいけないよお。私は布団に入らずに外に出ることにした。外出だ。おお、なんという進歩だろうか、この私が出掛けようとしている、外は寒いぞ気をつける。季節は冬だ。

外は暗かつた。人通りもない。当たり前だらう普通の人ならとっくに寝ている時間なのだから。明日も会社や学校に行くのだから。私はというと明日も何もない。明日もといつか未来が見あたらない。普通の人は嫌だ嫌だと言いながらもやるべきことをやつているのに。昔は私にもそう言う時期があつた、ずっと休みならどれほど良いかと思っていた。しかし、無限の休みが与えてくれるこの疎外感はなかなかヘビーだ。夢を追い会社を辞めたはずだったが、いつの間にか夢を失い堕落して社会復帰も儘ならぬということになってしまった。虚無であるよ。しかし、心まで腐りきったと思っていたのに、外出をするなんて素敵なやつだぜ俺つて！ナイスガイ！と己を奮い立たせたものの困つたことに行き先が無い。どこへ行こうかな？と怖い怖い。しかしあま、一いつ時はコンビニというのが定番だろう。深夜のコンビニで立ち読みをしてお菓子を買って公園でも行く

のが「ゴールデンコースかな？レベル高いかな？」とにかく行ってみよう。そんな風だからダメなのだと、うつことに気がつかずについたが、とにかく私にとつては大きな一步、コンビニに向かうこととした。さすが深夜といだけあって誰もいない。店員が暇そうにしているだけである。店に入ってきた私を見て何か「ヨーヨー」と言つたようだ。たぶん、いらっしゃいませと言つたのだと思つ。やる気は感じないが久しぶりに人から何か言われてドキッとしたのは事実である。恥ずかしい。私の心はこんなに乾いていたのか…。

雑誌コーナーに行つてみて気づいたのだが普段雑誌なんて読まないからどれを手にして良いものか分からぬ。Hロ雑誌でも読むかと思つたが封がしてある。何と小癪な、もういい、読まない！私は第一のミッションを放棄してお菓子を買つことにした。情けない話である。

う～む、ここでも困つたことになつた。いつぱいありすぎでどれを買おうか迷つてしまつ。近頃はバリエーションが増えすぎているようだ。ここでもまじつてしまつ。私は買い物すら満足にできないのか一ちくしょーーおまけに店員がこちらを見つける気がして無駄に緊張する。なんだよあいつ、他にやることあんどううが、こっち見んなよ。と思って恐る恐る店員の方を見たが全然こっちのことなど見ていなかつた。むしろ他のことをしていく忙しそうであつた。うわ、恥ずかしい。コーラ買つてさつと出よう。

結局私はコーラだけを買って外に出た。これなら自販機で事足りたなと思うが、他人と同じ空間に入つたというのがこの日の成果ではなかろうか？と自分を納得させて公園へ向かつた。さすが深夜の公園だけあつて誰もいない。薄暗い街灯が逆に不気味である。このミッションはレベルが高いというか別の話ぢやないか、肝試し的なあれじやないか。と言い訳して帰ろうとしたら園内から不気味なうめき声のようなものが聞こえてきたからおつたまげ。すげー怖かつた。おまけにどこからか聞こえてくるメトロノームの音が最速のテンポを刻んでこると思ったら自分の心臓だった。早く帰ろう、そう思つ

た瞬間私の足下を黒い無数の陰がすごい早さですり抜けていった。

私は声も出せないまま固まってしまった。陰が行ってしまってからどのくらい経つただろうか？ようやく安心して動けるようになったとき園内の街灯の下に何か動くものを発見した。ようよるとかろうじて動いている感じであつたが、やがて倒れて動かなくなつた。気味が悪かつたので帰りたかつたが、何故か助けなくてはいけない気がして恐る恐る公園に入つて行つた。

街灯の下に倒れていたのは猫であつた。ぼろぼろになつて辛うじて息をしている状態である。私は何だか悲しくなつた。猫に食われたのだと思った。弱肉強食だよと呟いてみた。ミヤ…。猫がかすかに鳴いた。それは私に答えているかのように思えた。分かつてているさと言つているように感じた。

そんな以心伝心の最中に突然さつきと同じようなうめき声が聞こえてきたと思つたらさつきの黒い陰達が周りを囲んでいた。少しづつ目が慣れてきたおかげでその正体が見えてきたのだが、それは多くの野良猫であつた。どうやらこのぼろぼろになつた猫を狙つているようである。さつき出て行つた数よりも多い氣がするが、仲間を呼びに行つたのだろうか？こんな弱つた猫一匹のためにそこまでするのか？とにかくこの猫を助けなくてはいけないのだが、私は迷い始めていた。猫達の威嚇は続いている。ぼろ猫はよろよろと立ち上がり賢明に睨み返しているが多勢に無勢勝てるわけがない。巻き込まれたら私も怪我をしてしまうだろう。そんなアホな話はない。だいたい人間が野良猫と戦おうと思つたら武器を持つてやつと互角だという話を聞いたことがある。今の私がもつてているものと言えば、コーラだけ。これでどうやって助けりやいいんだ？猫達のにらみ合ひが続く中で私の中でも葛藤が繰り広げられていた。助けるべきか見捨てるべきか。そのとき私に名案が閃いた。私はぼろ猫を抱き上げた。猫は少し抵抗したが、体力が続かずにつぶつぶになくなつた。なんか臭かつた。周りを囲んでいた猫達の鳴き声が一瞬止んだ。私は持つていたコーラを思い切り振つて地面に叩きつけた。パン

!とものすごい音がして「ourke」のペットボトルが暴れた。猫達は怯んで逃げ出す者もあつた。私はその隙にぼろ猫を抱えて家までダッシュで逃げた。久しぶりに全力疾走といつものをしたのでしばらく息が整わなかつた。ぼろ猫もはあはあ言つていた。一人してぐつたりした。猫は取りあえず生きているようで良かつた、朝一で病院に連れて行こう。

俺はここをまとめてる権威つてもんだ。と言つたつて別にやりたくてそんなことをしているわけじゃねえ。だいたい自由気ままな単独行動をモットーとするキャツツにまとめ役なんていらねえはずだ。

ニヤーーー。俺が猫あることを忘れないようにたまに鳴いておく。ニヤーーー

それがどうしてこうなつたのか?それは奴が変な思想に駆られて妙な行動をとるようになったからだ。幾ら自由気ままと言つたつて限度がある。猫の世界にもそれなりに節度つてもんがあるんだ。あいつはそれを破つた。要するにやり過ぎたんだよ。そこで誰かが制裁を加えようとしたんだが、困つたことについはめつぽう喧嘩が強いらしい。まあ、俺程じゃないがな。にやつははは。はは。何四もやつに挑戦したがまったく歯が立たなかつたつてんだからもうここらはやつの独壇場よ。そこで困つた猫どもが俺に助けを求めるに來たつてわけだ。俺なら何とかできると思つたんだろうが、正直困つちました。腕に自信はあつたが、それはもう昔の話だ。今更俺を頼られても…と初めは思つた。だが、若いもんに頼られるつていうのは中々悪くない。そいでついつい引き受けちまつたつてわけよ。

まあ、俺一人でつてのは無理だと思つんだがニヤーーー。まあ、その、良いよにうに言つくるめられてさ、皆でやろうぜつてことになつて俺は親分に納まつたつていうニヤーーー。とにかく俺は、いや、

俺達はあいつを懲らしめてやらなくちゃならねえわけよ。ぶつ殺す！ていう氣でいかないとな。にやつははつはつは。はあ…、まじどうしよう…。親分とか言われて良い気になつてると正直やめてほしいんだよね。だいたい猫が組織を組もうって無理でしょ？それぐらにあいつらも猫なんだから分かれよ。こや、そういう都合の悪いことを無視する能力ゆえに猫なのかもしない。それに一番気になるのはあいつらが俺に任せっきりで何もしようとしないことだよ。何もしないどころか俺に押し付けて自分達はもう関係ないですみたいな態度だよ。おい、こら。ニヤーニヤー。あいつらがそんなだから俺もふてくれて日がな一日屁をこじて「口」口して過いきなきゃならんじゃないか。ああ、やべ、考え方してたら眠くなつてきたにゃー。寝よ。ZZZ。

ニヤたしには義務がある。それはこの弛みきつた野良猫共に生きる
とはいがなることかを教えることだ。生命とは争いの上に成り立つ
てはいるということを分からせなくてはいけない。ニヤー ニヤー。ニ
ヤたしは人間との争いの末に蝉を捕食したのだ。ニヤたしは捕食し
た蝉の命で生きている。生き残るということはそういうことのはず
だ。ところが悲しいことに現状それを理解している者は皆無。ニヤ
たしは悲しい。

う……ガーガー……「ひっ」はあはあ……。毛玉を吐いてしまった。

ニヤたしはそれを教えるために餌を横取りしたり、繩張りを荒らしたりした。するとやつらは私を敵とみて排除しにかかりました。ふざけてませんか?と思つたがもう一つニヤたしの心に浮かんだ思いがあつた。それは以外にもいいじゃない。というものだった。そうなんだよ、生きるとは戦うことだよ。安住なんて死んでいつた者への冒とくだよ。もっと危機感を持たなきやいけないよ。そうだよ、ニヤ

たしは悪役になろう。なるべきだ。ところがだ、予想外というか拍子抜けしたのはやつらの弱さよ。すんげー弱かつた。正直初めて喧嘩みたいになつた時はニヤたしもビビつたよ。でもちょっと小突いたら、にゃん！とか言って逃げちゃつた。ニヤー二ヤー。そいつだけが弱いのかと思ったら来るやつ来るやつ皆弱い。どうなでんだ？ニヤたしが強いのか？しかし、油断していられないというのはどうやら向こうはあの権蔵を抱き出したらしい。権蔵と言えばもう昔の猫だが、その武勇伝たるやすさまじい。元は飼い猫だつたらしいが飼い主が引きこもりだつたらしく、その唯一の遊び相手として大切にされていたそうだ。ところがある日引きこもりのオタクヤローが何を血迷つたか猫耳に興奮して権蔵を犯そうとしたらしい。その時権蔵は飼い主の性器を食いちぎつて殺したのだそうだ。それから権蔵は人間を恨むようになり若い時に5人の人間を殺したといふ。まじ怖い。

こんな噂話がある。やつは熊を倒しに北海道まで行つたといふ。鮭を食ひに行つたというのが本当のところらしいが、どうやらその時に熊と戦つて殺したといふ話しだ。俺は熊を殺すような奴と戦つて勝てる自信はない。だつて俺は猫だし。ニヤー二ヤー。結局鮭ではなく熊を食つて、それからというもの熊の味が癖になつて何度も北海道に行つていると言つから驚きだ。まじばねー。もうだめだよ。俺に任されても無理だよ。はあ、取り合えず腹減つたから出かけよう。餉の時間だよ。

ニヤたしの情報だとさらに先がある。やつは人間だけじゃなく何とドーベルマンを相手に奮闘、結果十七匹を殺したらしい。それもた

だのドーベルマンじゃない、警察犬として鍛え上げられたドーベルマンだ。一体どうしたらただの野良猫にそんなことができるんだ？ていうかニヤたしはどうしたらいいんだ？もつ無理。そんな奴に目をつけられたら生きるとほなにかとか言つてる場合じゃない。こえーよ。とにかくお腹が空いたからニヤたしは出掛ける。ニヤーニヤー。

だいたい熊を食つていうのはどんな気持ちなの？どうしたら食おうという発想になるの？俺も食われちゃうの？共食いじゃん。ダメじゃん。野性味あふれすぎじゃん？既に食われた奴がいるって話だが…。

おっと、考え方しながら歩いてたから見逃すところだつたぜ。へっぷへっぷ。もとい、にゅっぷへっぷ。人間どもの廃棄弁当だ。頂くとしますかね。

権蔵ももう年だそうだが、そんな凄い武勇伝をもつ男がちょっと年取ったぐらいでニヤたしなんかが勝てるとは思えない。これは暫くおとなしくしてようかな？

おっと、考え方しながら歩いてたから見逃すところだつた。へっぷへっぷ。もとい、にゅっぷへっぷ。あれは人間どもの生ゴミだな。カラスにつつかれる前に物色するか。

食つたは良いがどうも腹の調子が良くない…。と思つたら突如襲つてきた吐き気。これはあれだな、毛玉だな。うげえ…。はあ、はあ

…。うげえ…。ふつ、苦しかったと思つた私の心臓をせりて苦しめたのは驚くべき激臭であつた。何事かと顔を上げるとそこにいたのはやつじやないか…。なんでこんなに臭いんだ？俺死ぬのかな…？

あ～、うんこしてーと思つてブリッとした我ながら激臭に驚いてひんむいた田がさらにはひんむかれたのは向こうからやつてくるあれは權蔵ではないか。やべー。なんかむせていろようだが…？

お互いがお互いに気がつくとお互いが同じこと思つた。気が付いてないふりをしよう。一匹は何食わぬ顔で平静を装つてすれ違おうとした。しかし、何故だらう？こんな時に限つて何か起きてしまつのは。權蔵がくしゃみをした。思わず見てしまつた。田があつた。二匹は思つた、目が合つてしまつたよ。

「リーダー準備は整いました。」

「うむ。いよいよ先代の恨みをはらす時が来たな。そして、恨みをはらすと共に我々の恐ろしさをやつらに教え込んでやるのだ！」地底で密かに動きを見せてこる集団があつた。彼らの目的は先代のリーダーであつたアブラゼミの仇を討つことである。何を隠そうその先代のアブラゼミと囁つのはかつて猫により捕食され、捕食した猫に生きることを悟らせたあのアブラゼミであつた。そう、死の間際仲間に向けて発信した信号はしっかりと受信されていたのである。そして次の世代の蝉達がいよいよ成長し、次の夏には成虫となり、繁殖のために地上に姿を表わすのである。しかし、次代の蝉達は考えた。普通に成虫になつたところで出来ることと言えば小便をひつ

かけるくらいである。それはさつきり言つて別に怖くない。むしろ情けなさで泣きたくなる。ミンミン。どうしようか。蝉達は悩んだ。どうしてやるくなっちゃいけないことや考えなくてはならないことがあると別のことだが気になつてしまつのだらうか。悩みだすと蝉達は寝てしまつた。だってそれが本業だしといつのが言い訳であった。本業に精を出すうちに次の夏には成虫になつてしまつという事態になつてしまつた。そんなある日誰かが言つた。

「奇襲とかでよくね？」

そして、その誰かが今や新たなリーダーとなり何となく敵討ちの体面を保つていた。そして、間もなく奇襲作戦が開始される。リーダーは少し不安であった。皆も少し不安であった。正直言つて眠かつた。

地上ではにらみ合いが続いていた。どちらのメッキが先に剥がれるかという情けない弋ぐり合いでもあった。どのくらいの時間が経つたであろうか？一匹を囲むように野良猫たちがいつの間にか集まり始めていた。お互いに消耗しきつていて後は気力だけににらみ続けていくような状態である。それを見計らつたかのように地中から這い出でくる無数の黒い固まりがあった。夕焼けに照らされオレンジ色に光る体が猫達の足下に広がった。それは蝉の幼虫であった。こんな時期に地中から出てきて、しかもその目的はどうやら脱皮や繁殖行動ではないらしいことはその異様な様子から伺つことが出来た。

ニヤー……！

突然一匹の猫が叫んだかと思つと飛び上がりもんどうをうちはじめた。なんだ？と思う間もなく一匹目、二匹目と次々にもんどうをうちだす猫達。それは蝉の幼虫に肉球を思い切り噛まれたためであった。しかも一匹だけではない、無数にいる幼虫から手当たり次第に

攻撃をくらうのである。「これはさすがの猫もたまらない。大勢の猫が倒れ、残りはにらみ合いを続ける一匹だけとなつた。一匹の足下にも当然幼虫達は群がつていたし、他の猫達と同様に攻撃も受けている。にも関わらずなぜ一匹は立つたままにらみ合いを続けていられるのであるうか？

くそ、蝉のガキどもめ、すんげい痛いじゃないか。しかし、ここで倒れたりしたら今度は蝉みたいな生やさしいものではない、人間を5人も殺しているあいつが襲ってくるに違いない…。それはまじでやばい。ここは意地でも維持しなければ。はは、こんな状況でもダジャレが出てくるなんてニヤたしもたいしたものだな、いける一ヤ！

くそ、なんだこいつらは、めっちゃ痛いじゃないか。しかし、ここで倒れたりしたら今度は蝉みたいな生やさしいものではない、熊殺しが襲ってくるに違いない…。それはまじできつい。ここは何としてもにらみ合いを続けて、相手が飽きるのを待つしかない。しかし、あいつのあの不適な笑みは何だ？とりあえず俺も笑つておこう。

恐怖が痛みを凌駕している。一匹にとつて蝉の幼虫など目の前の恐怖に比べれば全くたいしたものではなかつた。目の前の恐怖というかただの妄想にすぎないのだが、一匹にとつては現実なのである。哀しいね。

ニヤー……！

倒れていた猫達が一斉に悲鳴をあげはじめた。幼虫達の第一の攻撃が開始されたのだ。倒れて動けなくなつた猫達を何ということでしょう、あらうことか食い始めたのである。しかし、動けないと決してそこは猫である、持ち前の身体能力を使って寝た状態であるにも関わらず応戦を始めた。逆に幼虫を食いだしたのだ。まさに食うか食われるかの地獄絵図であつた。ここにきてにらみ合いを続けていた一匹も漸くやばいと思い始めていた。

ニヤんだよあのガキども、猫を食い始めたぞ。これはいかんよ。猫

達も応戦しているけど、さすがにこの数相手じゃ死ぬやつも出でるし、死なないにしても大怪我だ。ニヤたしもこんなことをしていふ場合じゃない、さつさとずらかう。

うわ、蝉が猫を食つてやがる。逆だろ普通。ていうかやばいじゃん、多勢に無勢じやん。逃げなきゃ。と言つてさつさと逃げるわけにも行かないのは仮にも俺はこいつらの親分。一人で逃げるわけには行かない。でも、じゃあどうするんだよ俺？

そのとき権蔵があることに気がついた。なぜか奴の周りだけ幼虫の数が少くないか？なぜだ？あ！幼虫がうんこを避けてやがる！蝉に嗅覚があるとは知らなかつたぜ。よし、とにかくもう猶予はねえ、これでいくしかねえ。

「おい、てめーら！寝てねえで良く聞け！死にたくないりやあ腹に力入れろ！全力出してひねり出せ！！！」

なんのことか分からぬ猫達であつたが死にたくないりやあ腹に力入れろ！全力出してひねり出せ！！！」

「おい、てめーら！寝てねえで良く聞け！死にたくないりやあ腹に力入れろ！全力出してひねり出せ！！！」

「おい、てめーら！寝てねえで良く聞け！死にたくないりやあ腹に力入れろ！全力出してひねり出せ！！！」

凄かった。もの凄かつた。もの凄く臭かつた。近所の犬が全滅した。飛ぶ鳥が落ちた。お爺ちゃんのボケが治つた。不良が更生した。生理が來た。産声が臭いだつた。

権蔵の奇策により蝉はほぼ全滅したが猫達の被害も大きかつた。一体何を食べたらこんなものが出来るのだろうか？権蔵は仲間達の窮地を辛くも救うことにつき成功し、己の窮地も脱したが今後のことを考えると少しうんざりしてしまう。今まで他の猫達に押し付けられる形で親分と言つことになつて以來、これを機に本当の親分になつてしまふだろう。そうしたらまた奴と戦わなくてはならなくなる。それは嫌だなあと思つてうんざりするのだ。今から追えば奴を見つけ出して何とかできるかも知れな。しかし、動けるものが少なすぎるし、俺自身消耗が激しい。どうしたものか？

はあはあ、全くひどい目に遭つた。何とか逃げてきたけど、ぼろぼろの身体で無理して走つたからもうダメです。ニヤー二ヤー。

生れるとは「いつ」となんだ。はあはあ。

「うぐうぐうぐ…、何といふことだ、我々アブリゼミがほぼ全滅とは…。先代のリーダーの無念を晴らすどころか返り討とは情けないじゃないか—ミノミン…」

「リーダー、見回り完了しました。」

「おお、御苦労。それで、他に生存者はいたのか?」

「それが…、残念ですが生存者はここにいる我々だけのようですね…。」

「そうか…。」

猫達の起死回生の奇策によりアブラザミ達は致命的な打撃を受け、残りはわずか五匹となっていた。

蝉たちは先代のリーダーが猫に食われ、非業の死を遂げたその仇を討つために今日まで日々訓練をしてきた。肉食にもなった。それが猫の糞に破られるとは思つてもいなかつた。無念である。まじむねん。

「リーダー、我々はこの先どうすれば…?」

「うん…、とにかく眠ろう。残された我々の使命は種の保存だ。絶滅だけは避けねばならない。繁殖をして戦力を蓄えるんだ。今はそれしかない…。」

「うう…、無念です。私は、私は…。」

ミーハミンミンミン、ミーンミンミン

季節外れの蝉の声。それは夏ほどの活気はなく、むしろ哀愁を漂わせている。おのれ見ていろ猫どもよ、糞に負けたこの恨み、いつかはさらさでおぐべきか。こうして蝉達の作戦は終わった。残されたわずかな蝉達は地中へと帰つていった。一人リーダーを除いて。

「お前達、後は頼んだぞ。」

そうつぶやくと、リーダーはばれないように姿を消した。

「先代を食つたのは間違いなく奴だ。せめて奴だけでも俺の手で倒す！」

「ニヤアニヤア、ここまで来れば安心ニヤン。それにしても蟬が襲つてくるとはビビッた。おかげで助かつたけど。」

何とか逃げ出すことができたもののかなり消耗しているのは確かであつた。こんな所をまた襲われでもしたら万事休す。ここは暫く身を隠しておくのが良いだろうと考えた猫はちびりそうになつた。ここまで来れば安心と思っていたここは近所でも有名な野良猫の集会場となつていてる公園ではないか。なんてこつた。ちょっと気付かないふりをして出て行つてみようかな？そんなアホなことしか思いつかなくなつていた。しかし、園内の猫が見逃すはずもなく、案の定囮まれてしまつた。囮まれてしまつたけど氣付かないふりでやり過ごすしかなかつた。当然無理ですよね。しかし、幸いなことに数が少ないのは他の連中はさつきの喧嘩に参加していたのだろう。つまりここに残つているのは大したことのない、云わば雑魚である。それを確信させるのは見覚えのある顔がちらほらある。その顔と言つのはかつて自分に喧嘩を売つてきて即退散していつたやつらだ。これらならハッタリで何とか切り抜けられるかもしれない。そんなことを考えてニヤツと笑つて見せてみた。殴られた。痛かつた。まじむかついた。こんな雑魚に殴られる屈辱と情けなさが怒りになつて消耗しきつた身体で殴つてきた猫をボコボコにしていた。

「けつ、雑魚が、ざけんじやねえ！」

ふと冷静になつた時、もうこれ以上は戦えないと悟つた。立つてゐるのがやつとであつた。しかし、雑魚ども相手に今のデモンストレーションは効果絶大であつた。ただ、うなり声を上げるだけで誰も襲つてこようとはしなかつたのだ。勝機はここしかないことを悟つて思い切り叫んだ。

「かかってこいやー腰ぬけ共ー」ねえなりじちから行くぞーてめえら全員ぶつ殺す！」

叫ぶなり動くそぶりを見せると全員逃げ出した。公園の外へ凄い勢いで走り去つて行つてしまつた。はは、情けない野郎どもだ、これで一安心だな。そう思うと力が抜けていくのが分かつた。ふらふらと歩くと街灯の下で倒れてしまいそのまま動けなくなつた。このま少し眠つてしまおうか？それは危険すぎるだろう。でも、眠いにやあ。何かが近づいてくることに気づかないほど消耗していた。それに気づいた時にはすでに逃げられる距離に無かつた。それが見下ろしているのが分かつた。何をするでもなくただ見下ろしてくる。殺すなら殺せ。そんな思いが込み上げてきた。もう疲れたよ。

「弱肉強食だよ。」

そんな声が聞こえた気がした。そういうことかと思つてミヤ…と答えるのが精いつぱいだった。

「権蔵親分、大変です！やつが集会場に現れました！」

疲弊しきつていた権蔵のところに公園から逃げてきた猫達が押し寄せていた。権蔵は思つた、何故こいつらは奴を倒さなかつたんだろう？かなり消耗しているはずなのに、こいつらまさか逃げてきたのか？情けなくなつて溜息をついたがとにかく奴を放つておくわけにはいかない。

「よし、動けるやつらとトメーらは俺に続け！」「でカタをつけるぞ！」

権蔵の声に反応して何匹かの猫達が立ち上がつた。逃げてきた猫達は戻るのが嫌そうであつたが、権蔵に一睨みされるとしぶしぶ従つた。

「奴はもう消耗しきつているはずだ！糞だつてもう出やしねえ！猫なりの秩序つてもんを教えてやろううぜー！」

権蔵は走り出した。皆それに従つた。

ミンミン。さて、意気込んだは良いがどうやってやつを倒すか？リーダーには何の考えもなかつた。まいつた。この小さな身体で、しかも成虫にもなつていないのでどうやって猫を相手にすればいいのか、勢いだけでは越えられない壁がある。そしてこの寒さである。普通なら地中でぬくぬくと眠つてゐるのに、慣れない寒さで思考力も低下してきた。これではやつを見つける前にこっちがへばつてしまふ。何か、何か良い考えは無いものか…？そんな、思い悩むリーダーの眼前を物々しい集団が駆けて行つた。それはさつきまで死闘を繰り広げていた猫の集団であつた。リーダーはむかついた。あれだけ奮闘したのにやつらはもうあんなに元気に駆け回つているじゃないか。こつちは絶滅の危機だと言つのに。我々にもあんなに頑丈な身体があればいいのに。リーダーは切に思つた。そして閃いた。そうだ、奪つてしまおう。都合良くリーダーを見下ろす猫があつた。その顔を見上げながらリーダーは悲しくなつていた。その顔が余りにもアホ面だつたから。こんなアホ面に敗北したと思うと怒りと情けなさと悔しさと、色々な感情が混ざり合つて思わず号泣した。ミンミンミンミン。そんなリーダーの気持ちなどまるで知らんと言うように猫はリーダーを食べた。リーダーの最後の戦いが始まつた。

「権蔵親分、あそこですゼ！」

「おう、俺にも見えているぜ、ぶつ殺す！」

「ちょっと待つてください、親分、人間が居ます。」

「む…、本當だ。何をしていやがるんだ？しかもあの人間の足元に転がつてるのは奴じやないか？」

「どうします？やつちまいますか？」

「いや、また。ここは様子を見ながら少しづつ囮んでいくんだ。ばれるなよ。」

「ヤたしはここまでだろ？弱い者は死ぬ。」
ヤたしは弱かつたのだ。結局一人では何もできないのだ。最期を人間なんかに見られるなんて猫失格だ。ちくしょう！まだやりたい事が沢山あつたのに！可愛らしい雌猫とニヤンニヤンして、いっぱいニヤンニヤンして、それからマタタビたらふく食つて、年とつたら飼い猫になつて炬燵で丸くなろうと思つてたのに！こんな寒い夜に倒れて亡骸は凍つてしまつて、春になると解凍されてカラスにでもつかれるのだろうか？最悪じゃん。ヤたしは保存食になつてしまふのか？嫌だヤ…。
この人間にでも助けてもらおうかな？つておい、どこ見てんだ？
「ヤたしとしたこと、罔まれていることに全く気付かないなんて、さつきのやつらが戻ってきたのか？いや、それだけじゃないな、権威達もいる。くそ、権威だつてボロボロのはずなのに…。

ようようと起き上ると懸命に闇の中の猫達を睨んだ。闇の中からは猫達の威嚇するようなうめき声が聞こえてきていた。もう駄目だと思ったとき身体が宙に浮いた。何事が起きたのか分からなかつた。あるいはもう死んでしまったのかとも思った。分からないま意識が遠ざかつて行く。本当に死ぬのかな？分からない、分からない…。

その時何か破裂音がした。ヤたしの身体は何処かへ飛んでいくようだった。蝉の声が聞こえたような気がした。

「…」

リーダーを食つた猫が暴れている。というよりはのたうち回つて
いる。

「ハハハ。何がどうの辺りだろ？ 脳まで行ければ良いのだが道が分からぬ。口から入つたからこのままで胃袋に行つて消化されちゃうのかな？」

猫が苦しんでいた原因は猫の中でも迷子になっていた。起死回生の最後の策にでたリーダーは猫の身体を乗っ取ろうと考えたのである。蝉の考えることは恐ろしいですね。

蝉はウロウロした。猫は苦しみだ。蝉はウロウロした。猫はもつと苦しんだ。蝉は屁をこいた。猫も屁をこいた。どうやら脳にたどり着いたようである。

「ハハハ。エリが脳か。身体の割に小さいな。」

蝉は脳に取り付くと口を突き刺した。

「ミンミン。成功したぞ！この技を後世に伝えられたら我々蟬の時代がやってくるな！まずはやつを倒すことだが！」

仇を求めて。

公園に着くとそこには何やらどなり散らしていいの權威とおもろ
うている猫達がいた。そこには奴はないなかつた。

リーダーの不用意な一言で権威がさらに怒り出した。

「貴様！今更のこのやつてきて、今まで何していやがったー。」

権威の余りの剣幕にリーダーはビビった。ビビったがそこは猫に恨み

はキレイていた。

「うるせえ！ おいぼれ！ テメーに蝉の気持ちなんか分かんねえよ！」

権蔵はキレた。全力でキレた。消耗した身体で信じられないほどキレた。

公園に残されたリーダーの新しい身体は早くも使いものにならなくなっていた。権蔵達はやつを探しに行つてしまつて誰も残っていない。

「ミンミン。このまま終わつてたまるか……。」

リーダーの戦いは終わらない。

目が覚めると部屋中真っ白だった。どうやら天国に来れたらしい。死ぬ前は死ぬのが嫌だつたけど、いざ天国に来れたとなると結果オーライだなと思つてしまつのは猫だからだろうか？そんな短絡思考な頭を撫でてくるものがあつた。神様だろうか？それは白衣を着て優しそうな顔をしていた。やはり神様だ。神様はニヤたしの手を握つてくれた。そして、優しく撫でてくれた。注射まで打つてくれた。こいつは神様じゃないと確信した。いてーよ。ここは地獄だろうか？また眠くなつてくる。まどろみの中で誰かがニヤたしを覗き込んでいるのが分かつたが眠気に逆らえる猫なんていない。いや、逆らう猫なんていないというのが正しいな。

「先生、様子はどうですか？」

「はい。怪我はたいしたことはないですね。しかし、体力の消耗が激しいです。暫くは安静にしておかなくてはいけません。」

「そうですか。入院ということになるのでしょうか？」

「今日のところは入院していただいた方が

良いでしょ。明日また来てください、経過を見て判断していくましちょう。」

「分かりました。よろしくお願ひします。」

私は自分が何故野良猫のためにここまでするのか分からぬ。でも、街灯に照らされて倒れこんでいる猫を見ているとどうしても見捨て

ることなんてできなかつた。同じ猫の仲間に囮まれたあの猫を放つておくことなんてできなかつた。どこか今の自分と重なるところがあつたのかもしれない。しかし、それが猫だなんて皮肉だらうか？不意に涙がこぼれ落ちた。私は泣いていた。それは猫や自分の境遇を思つて泣いたのではない。それは会計を済ませてから突発的に溢れてきたのだ。突発的に。何かを守ると言うのは金がかかるのだな。私を囮むものは何なのだろう？誰なのだろう？涙をこまかすために私は考えるんだ、考えるんだ、私は。これから、その、あれを…。私は誰の心配をするべきなんだろう？

公園に残された、かつては猫で今はアブラザミのコーダーにその体を乗つ取られて、野良猫の親分の権蔵にボツコボコにされて動かなくなつたそれにカラスが群がり始めていた。やばい状況である。しかし、リーダーは冷静であつた。むしろわざと死んだふりをしてカラスが集まるのを待つてゐるかのようでもある。何を考えているのか？数十羽のカラスが集まつたころでリーダーは動いた。カラスも動いた。カラスがリーダーを啄ばもうとしたその時、リーダーの背中がぱっくり割れてニユーリーダーが誕生したのである。カラスは逆にニユーリーダに食われてしまつた。そのカラスだけではない、園内に集まつていたカラスは全て食われた。肉食になるように訓練されたリーダーが肉食である猫の体を奪いそして蝉として成虫を迎えたこのニユーリーダーはそれはもう肉食であつた。カラスなんかまじ餌ですよね。とは後にこのニユーリーダーが言つたとされる台詞である。

「ミンミンミン。この体は…、素晴らしい！」

それは蝉と言つには余りに大きく猫と言つには余りに蝉であつた。意味が分からぬ。要するにでかい蝉が誕生したのである。違うところと言えば口である。通常の蝉のようにストローのような口では

なく猫の口のような鋭い歯を備えた口になっていた。口だけ見ればまさに肉食獣であろう。こんな体を持つてみたくてしようがなくなつていた。そんな衝動に逆らう理由も無いなと思つたリーダーは取り合えず思い切り鳴いてみた。園内の動物は全部死んだ。ニユーリーダーは己の力にビビった。そして思った、もっとカラスを食べればもっと強くなれるはずだ。そうすれば猫などに遅れをとることなど…いや、もうそんな小さな次元で収まる私ではないはずだ。そうだ、私はもっと大きな世界でリーダーになるのはずだ！敵討ちなどもうやめだ！私はこの世を支配し、蟬の王国を作る！ニユーリーダーの新たな野望の始まりであった。

翌日私は猫を迎えて病院まで行つた。昨日までの衰弱ぶりが嘘のように元気になつたように見えた。医者の腕が良いのだろうか？当の医者本人もその回復ぶりには驚かされているようであつた。

「凄い回復力ですよ。きっとこの子の生命力はずば抜けているのでしょう。いや、驚きました。」

ズば抜けた生命力を持った野良猫がズば抜けで社会性がない二トに助けられるなんて屈辱だらうなと思った。猫はそんなことは知らんぷりであくびをしている。あんな状態だったのに気楽なものである。

病院からの帰り道、私は考えていた。成り行きで助けてしまつたが、この猫をどうしたものか？恥ずかしながら私は二ートである。猫を飼うどころか己の生活すら儘ならない。とはいえるまま放したらきつとまた他の猫達に狙われてしまうだろう。それでは折角助けたのに殺してしまうようなものだ。考えがまとまらないまま家に着いた。猫は寝ている。私は通帳を開いて残高を確認した。溜息をついた。猫はまたあくびをした。むかついたので屁をこいた。猫は

小さく鳴いた。

カラスが姿を消したという二コースを聞いてそういうえば最近カラスを見ていないとこに気がついた。それよりも世間にぎわしている二コースがある。それが蝉の異常発生で、しかもそれが真冬の出来事というから世間は好奇心とある種の恐怖心で興味を惹かれたのだ。このくそ寒いのに蝉の勢いは真夏のことである。専門家も首を捻つて意味が分からぬといった様子であった。原因不明ということも世間の目を惹く一つの要因であることは間違いない。

しかし、面白がつばかりもいられないのは冬の澄んだ空気の中で夜通し鳴かれたのではつきり言つてうるさくて敵わない。それが原因でノイローゼになる人も出でてきたそうだ。それでも人間の方がまだましだと思えるのは、人間以上に睡眠が必要な猫がいるからである。ずば抜けた生命力と言われたはずなのに今やその影も見えず、なんともつらそうで見ているこっちも参つてくる。そんな事情などお構いなしに蝉達は鳴き続いている。その数は日に日に増しているようであつた。思えば猫を助けたあの日から何かおかしなことが続いているように思つ。カラスだけでなく猫も減つている気がするのは私だけだろうか？かつては蝉を食べてしまつた猫を恨んだこともあつたが、今となつてはあの大量の蝉を食べて欲しいのだが、この鳴き声にまつて何処かへ逃げてしまつたのかもしれない。しかし、このまま蝉が鳴き続ければ猫だけでなく人間だつて逃げ出しかねない。世の中がおかしくなる前に手を打たないと。ていうのは二ートが考えたつてどうしようもない話である。情けないけど、とにかく今はうちの猫を何とかしてやるつ。自分の届く範囲でしか人は動けないものさ。

蝉の世界を夢見るニユーリーダーの計画は着々と進んでいた。作戦の第一段階は既に成功と言つてよかつた。蝉の鳴き声によつて世の中の機能はほぼマヒしている状態である。しかし、この真冬の蝉の異常発生とはどういうことであるうか？それはひとえにニユーリーダーの頑張りであつた。カラスを食す傍らニユーリーダーは仲間を増やすことを怠らなかつた。猫の体を手に入れたニユーリーダーは雌猫を見れば片つ端から犯した。犯された雌猫は三日もしないうちに蝉を生んだ。それも最低でも三十四は生んだ。生まれた蝉は生んだ猫を食つた。こうして生まれた蝉は冬の寒さにもめげない元気な子に育つたのである。結果、世の中からカラスと雌猫が激減して蝉が爆発的に増えたのである。そしてニユーリーダーの計画は第二段階へ移行しようとしていた。

「ミンミンミン。そろそろ計画を次のステージに移すか。我ながら第一段階はうまく行つた。この調子で全種族蝉化計画を進めるのだ。

「全種族蝉化計画。ニユーリーダーの計画はいつである。まず蝉の鳴き声によつてあらゆる生命の活動を鈍らせる。そして弱つたところを蝉達に襲わせてその体を乗つ取る。その後蝉として新たに脱皮させその種族プラス蝉という新しい種を生む。後はそれに繁殖活動を行わせる。これによりあらゆる種が蝉の要素を持つのである。そして、ニユーリーダーの下全ての種は蝉として生きていくのである。

今や計画は第一段階に入ろうとしていた。

ニヤたしを助けてくれた人間がまたもニヤたしを苦しみから救つてくれた。あの蝉のアホどもの鳴き声に苦しめられていたが、防音の小屋を作ってくれのだ。ええ人や。これで安眠できる。ニヤーニヤー。おまけに飯まで食わせてくれるし、もしかしてこれが飼い猫

とこうものなか？まじかよ。こんなことならもつと早く飼い猫になつとけばよかつた。今頃権蔵達はあの蝉の鳴き声に苦しんでいるに違ひない。ざまあ見やがれ、この現代を生きて行くには野生より知恵が必要なんじや、にやはは。ニヤたしも大人になつたなあ。にやはは。

動物園の動物がミニミニンと鳴き出したそうだ。二コトリは朝ミニミニンミニンと鳴くし、犬もミニミニンと鳴く。最近では人間でもミニミニンと鳴く人が増えてきているそうだ。世間は大騒ぎだ。蝉の駆除は追いつかないどころかどんどん増えている。そんなある日一通の手紙が届いた。それには昨今の蝉の被害云々とかそれにより今後予想される損害云々とか色々と書かれていたが、要するに駆除をするから手を貸してくれというものであつた。この手紙はどうやら二トを対象にばら撒かれているらしいというのはインターネット掲示板で騒がれていることだつた。真つ当な人達は今やノイローゼ状態で外に出れば蝉に襲われてしまつ恐れがあるため学校や会社はほぼ閉鎖状態という異例な事態になつてゐる。そんな中一日中家にいて体力が有り余つてゐるであろう二ートが駆り出されこととなつたのだ。この手紙は云わば赤紙であつた。蝉を駆除できればそれに越したことはないし、何の生産性もない二ートが死んだところで痛くも痒くもないという裏も見え隠れした。ネット上では手紙を受け取つた二ート達が騒いでいる。断固拒否という流れができていたがいつのまにか否定的な書き込みは削除され、書き込みをした二ートは姿を現さなくなつた。当然皆思うことは同じであつたが誰もそこにつれようとしなかつた。そして二ート達は蝉退治に駆り出されるのである。

権蔵は死を覚悟していた。仲間達は既に散り散りになつていて生死も定かではなかつた。どうしてこんなことになつてしまつたのか？思えばあの日蝉の幼虫達に襲われた時から何かがおかしかつたのだ。今更考へてももうどうしようもない、後の祭りだ。今できることはこうして身を潜めることだけなのか？それもいづれ見つかってしまうだらう。蝉達は数が多いだけではない、その統率力は猫以上であった。猫以上と言うと逆に低そうに感じてしまうが、そうではなく、じやあ何以上にしようかな？とにかく凄かつた。軍隊みたいだつた。権蔵は思った、統率力が凄いということは逆に蝉の親玉を叩けば残りは簡単に叩けるかもしれない。何とか親玉を探し出せないだらうか？そう言へば奴はどうしたろうか？あそこまで追い詰めて蝉と人間のせいで倒せず終い。その後も行方を捜したが見つからなかつた。奴も蝉にやられたのだろうか？奴の力があれば何とかなるかもしれないのだが。権蔵は考へているうちに眠くなつてきた。呑氣である。これが猫の哀しい性であろうか？

ニヤんといふことでしょう。事情はよく分からぬが主人が蝉退治に出かけるらしい。それは別に良いのだが、ニヤたしの面倒は誰が見るのはどうか？ニヤーニヤー。困つたことになつてしまつた。そういうえは、ニヤたしの面倒を見るようになつてからどうやら主人は労働を再開したらしい。バイトと言つらしげ、とにかくご苦労なことである。おかげでニヤたしは蝉の鳴き声も気にせず惰眠を貪つてこれた。そんな主人にちょっと恩返しでもしてみるか。よし、ニヤたしも戦う！蝉ぐらい食つてやる。そういえば昔人間と蝉を争つたことがあつたけど、これから人間と蝉を退治に行くなんて、何とも不思議なことだ。生きるつて不思議な巡り合わせの連續だな。

蝉は超絶に強かつた。二一トに体力が有り余つてゐる何て言つて認識は大きな間違いである。二一トは蝉のいい鴨であった。一日で壊滅した二一ト軍団は國からもあつさり見捨てられて今や私となぜか付いて來た猫だけとなつてゐた。昔は蝉を助けようとして猫と争つたが、今は蝉に食われそうになつて猫と戦つてゐる。なんじやこりや？生きるつて大変ですね。生きるつて不思議ですね。争うつて悲しいですね。

なぜ二一ト達が食われていく中私だけが生き残つたのかと云ふと、実は私は二一トではなくフリーターだったからだ。というのは嘘で、本当は猫が助けてくれたからだつた。襲い来る蝉を次々に食つていつた。今も足元でむしゃむしゃやつてゐる。それにしても気になるのはこいつつてこんなに大食いだつたつけ？それに体が一回り大きくなつてゐる気がする。ほら、どんどん大きくなつてゐる。食べる度に大きくなつて、うわ、ちょっとまで、落ち着け、うわわ。猫の食欲は止まらない。巨大化も止まらない。

何といふことだ、俺の体がでかくなつていいく！この蝉は普通じゃないぞ、このまま食ひ続ければ一気に親玉を叩けるかもしれない。ニヤーニヤー。

大きな鼾をかけて寝ていたところを見つかってしまった権蔵は睡眠を妨げられ、怒り狂つて蝉を食いまくつた。するとどうでしよう、何ということでしょう、これが恐ろしく美味かつた。びっくりした権蔵は余りの美味さに失禁した。泣いた。脱糞した。体がでかくなつた。食つた。食いまくつた。権蔵は夢中で食つた。そして我に帰つた時に体がでかくなつてゐることに気がついたのだ。権蔵は駆けだした、新たな蝉を求めて。

ニヤたしの背中に主人を乗せて歩いていると町の変貌ぶりが良く分かつた。主人が、あそこはああだつたとかこうだつたとか一々説明してくるからだ。ていうか何でニヤたしの背中に主人が乗つてゐんだ? いつの間にそんなに小さくなっちゃつたの? 蝉に食われたの? いや、違う。どうやらニヤたしがでかくなつたようだ。だつて目に映るあらゆるもののが小さくなつてゐんだからね。しかし、どうやら外を出歩いているのはニヤたしと主人だけのようだ。他は家にいるか蝉に食われたかしたのだろう。ニート達も綺麗に食られて跡形もなくなつた。今の時点で蝉以外の生存者がいるのかいないのか、それも分からない。

この国はもう駄目かもしけない。我々ニート軍団を助けに来なかつたのはどうやら偉い人たちは国外逃亡したらしい。こうなつたらやることは一つで、この蝉どもをこの国でくい止めると言つことである。蝉のリーダーを倒せば何とかなるかもしけない。猫もどんどんでかくなつてどんどん強くなつてゐるし。もう普通の蝉なら全く相手にならない。なんて頼もしいんだろう。こんな猫があと一匹いたら形勢逆転できるのにと思つていたら前から巨大な猫が歩いてくるのが見えた。

蝉の幼虫に襲われてからおかしなことが続く。カラスがいなくなり、そして雌猫がいなくなつた。なぜ雌猫だけがいなくなつたのだろうか? カラスは雄雌関係なく消えたのに。何故だ? そう言えばあ

の日妙な猫がいたな。逆切れしてきたからさうに逆切れしてぼっこにしてやつたつけ。もしかして、あいつが蝉に襲われた第一号だつたとしたら、それなら雌猫を襲うこともあるかもしれない。そうか、だとしたらここのらの猫が集まるところに親玉がいるかもしない。だとしたら、やつはあの公園にいるはずだ！

考えごとをしていて気がつかなかつたが、正面から歩いてくるでかい猫があつた。あれは奴じやないか？ 生きていたのか、さすがだ。ここは奴と共に闘して蝉どもをぶつ殺すしかないだろう。やつらの親玉の居場所なら検討が付いている。背中に乗つっているのは人間だろうか？

「一ヤー一ヤー。」
「一ヤー一ヤー一ヤー。」
「一ヤン。」
「一ヤー一ヤー一ヤン。」

猫の会話を聞きながら今後のことを考えてみた。何も浮かばなかつた。変わりに他のことが頭の中をぐるぐるしていた。何故私や猫だけが戦つているのだ？他の奴らはどうしたのだろう？まさか国民全員が国外逃亡なんてことはないだろう？いい加減出てきて戦えばいいのに。ああ、そうか私もこんな風に思っていたのか。戦わないものは戦わないと言うだけで恨まれるのだな。それは嫉みひがみに似た感情かもしれない。何で俺ばっかというのは誰でも持つてしまふ感情なのだろう。猫は何を話しているのだろう？

「ニヤたしと手を組もうと言つのか？」

「そうだ、一人でやれば蝉の親玉なんて直ぐに倒せるはずだ。」

「なるほど、親玉を叩けば統率はとれなくなると言つことか。しかし、どこにいるかも分からぬ敵の大将をどうやって探すんだ？」

「それなら既に見当が付いている。やつならおそらくあの公園にい

る。」

「なに？何故そんなことが分かるんだ？」

「それは敵の大将は始めに猫に寄生した奴だからだ。」

「いや、ニヤんだって！それは本当か？」

「ああ、おそらく間違いないだろつ。」

「畜生ーぶつ殺す！直ぐに向かおう！」

どのような会話が交わされていたのか分からなかつたが何か合意したらしく一匹は走り出した。どこに向かつているのだろうか？

「ミーンミンミンミン。よくこゝが分かつたな。さすが猫の感と言つやつかな？ミンミン。」

「仇をとらせてもらひうぞ蝉やうつ。」

「仇？ミンミンミン。それはこちらのセリフ。先代を食つたのは貴様だらう？今となつてはどうでもいいことだが、ちゅうどい、ここで貴様を殺して当初の目的をはらすとしよう。」

「ニヤたしが仇だと？わけのわからぬことを…」

信じられないほど巨大な蝉がそこにはいた。大きさで言えばゾウぐらいあつた。なるほど、これが敵の親玉か。こんな奴をどうやって倒すつもりだらう？私は支給された蝉駆除用のスプレーを握つた。猫達は蝉を両側から挟むようにして一斉に飛びかかった。そのとき蝉の大将は羽をばたつかせて突風を巻き起こした。猫達は吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。ダメージを負つたはずの権蔵であつたがすかさず立ち上がると今度は正面から飛びついた。

ニヤーー！

権蔵の悲鳴が響いた。ひつかくために降り下ろした手を逆に大将に噛みつかれてしまつたのだ。必死に振りほどこうとしているが全然離せない。権蔵の顔は苦痛に歪んでいた。何とかしなければと思うが私にはどうしていいか分からない。しかし、次に悲鳴を上げた

のは大将の方であつた。

ミーラン！

「ニヤたしを忘れてもらつては困る！」

権蔵に気を取られていた大将の懐にいつの間にか潜り込んで腹をえぐつた。権蔵は何とか逃れたが、今度はうちの飼い猫が苦痛のため倒れてきた大将の下敷きなつてしまつた。権蔵の片腕はもう使い物にならなくなつていた。私は決心した、猫を助けなくてはいけないと。大将は羽を無暗にばたつかせている。そのせいで突風が巻き起こり周りの民家は倒壊しだした。私は負傷した権蔵に助けられその懐で難を凌いでいた。私は権蔵に言った、次にこの風が収まつたら私をあの蝉野郎の口元まで連れて行ってくれと。伝わつたかは分からぬが権蔵は頷いたような気がした。更地と化していくかつての町を見ながら、心配だつたのは我が家の猫のことだけだつた。いい加減落ちつけよ大将。そして、そのときはきた。暴れ過ぎと腹をえぐられたダメージで弱り始めた大将の動きが止まつたのだ。私は権蔵に行こうと言つた。権蔵は負傷した手をかばいながらも大将の口元まで行つてくれた。私は支給された蟬駆除用のスプレーを構えた。大将の口が開いた。食われるのだと思った。それでもいいと思つた。私は開いた口にスプレーをおみまいしてやつた。これが意外に効いた。大将は思い切り悲鳴を上げてさつき以上に暴れ出した。私の鼓膜は破れ、暴れる大将によつて吹つ飛ばされてあちこちの骨が折れたようだつた。大将の下敷きになつていていた猫はぐつたりしていた。権蔵も何処かへ飛ばされたようだつた。万事休す。こちらには動けるものがいなくなつてしまつた。せめてこのスプレーをもう一度おみまいできれば仕留めることができるかもしれないのに。そう思つてはいる私の手からスプレーを奪つて飛んでいく黒い影があつた。それは一瞬であつた。私は何が起きたのか分からなかつた。飛んでいく影を目で追うと、それはカラスであつた。全滅したと思われたカラスがまだ生きていたのである。カラスはスプレーを銜えたまま大将の口中へ飛び込んで行つた。カラスの恨みであつた。暫く

暴れ続けた大将であつたがやがて動きが鈍り始めた。

「ミンミン…。おのれ、許せん。こんな所で我が野望が潰えるとは。
こうなつたら貴様ら全員道連れにしてやる…」

猫がよろよろと立ち上がり動けない私のそばにやつてくると、懸命に自分の背中に乗せた。どうやら私を連れて逃げようとしているらしかつた。私は泣いた。私は良いからお前だけでも逃げろと言つた。喋るのも辛かつたが、そう言い続けた。瀕死の權蔵もやつてきた。涙が止まらなかつた。その時最悪の事態が起きたのだ。

蟬のリーダーは自爆した。その威力はすさまじく地軸がずれた。私は猫の背中で最期を迎えた。猫も一緒に逝つた。權蔵も一緒だつた。ぱつとしない人生だつたけど、最後は守る者ができて生きる喜びを教えてもらえたように思つ。その猫に守られながら死んでいく。こういうのもありだよね?支えあうつてそういうことだよね?来世であえたら今度は同じ種族がいいな。そうしたら友達になれるだろう。その日までさよなら。その日まで世界よ続け。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3407ba/>

ブレイクスルー

2012年1月8日21時49分発行